



戦争と文化アイデンティティ

● 中谷 慎一

国労東日本本部 調査部長



私の父は福島県浪江町出身、母は山梨県の矢細工村。いまで言う早川の上の方です。私とは言うとも生まれも育ちも東京都江戸川葛西付近です。幼いころ父方の親戚が集まると「浜通り方言」母方が集まれば「国中弁」と耳から入る言葉の違いを子供ながらに楽しんでいました。

私が生まれ育った江戸川区葛西はというと、江戸時代には隅田川より西側を江戸市中の範囲外という事で、よく言われる「江戸言葉」に「下総言葉」の影響を大きく受け「浜言葉」が色濃く残っていました。お隣の浦安も今でこそ大テーマパークの街で日本のウエストコーストとして有名人などが多く住んでいますが、文豪山本周五郎の「青べか物語」でも紹介されているように「浜言葉」（漁師言葉）が当時は飛び交っていました。電車の中で女子高生が「俺のパパとママがよ〜」とか「いし何やってんで〜」（あなた何やってるんですか）「しゃもんだな」（しょうがない）「のてバカ」（目立ちたがり屋）などなどで高校生となり電車通学で多くの地域の友人と付き合うようになり初めて、指摘される訛りに困惑したものです。

日本全土に眼を向ければ「アイヌ語」「ウイラタ語」「ニヅフ語」「琉球語」などからなる各地方の方言はその土地土地の風土や国づくりの歴史の中で生まれ、その土地の文化アイデンティティとして育まれてきたわけです。

現在ロシアによる軍事侵略を受けているウク

ライナも 18 世紀にウクライナの大部分がロシア帝国領になったわけですが、ウクライナ語は「文化語」ではなく、単なる「農民の言葉」という扱いでした。ウクライナ語を使った文化活動も知識人を中心に試みられましたが、ことごとくロシア帝国から弾圧を受けました。

20 世紀に入り、ソビエト連邦が成立し、ウクライナはソ連の一共和国となりました。1920 年代は「ウクライナ化政策」と呼ばれ、ウクライナ語を使った作品が次々と誕生したのです。

しかしスターリンの時代になると、ウクライナ語は再び冬の時代を迎えることに。第二次世界大戦後、ウクライナ語を使った文学作品は出版されるようになりましたが、ロシア語優位の中で「停滞の時代」が続ききました。

歴史に翻弄され 1991 年のウクライナ独立により、ようやくウクライナ語は独立国家の「公用語」となりました。しかしウクライナ語がうまく話せないウクライナ国籍の人も多いのが現実。言語問題はウクライナを悩ます問題のひとつとなっています。

戦争は人命や土地を奪うだけでなく文化アイデンティティをも標的とされます。

この日本に生き働くののもととして日本が行った過去の侵略戦争の歴史に向き合い学びウクライナ国民に思い寄せるとともに、私たちは二度と加害者にも被害者にもならない。国際社会の恒久平和を世界に訴えるために何ができるのか考え行動していきたいと思っています。